



哲学者との出会い

幼少時、祖母の家の近所のスピッツに追いかけられ、泣きながら田んぼのあぜ道を走った私は、大人になってもよその犬とすれ違うときには、それと気づかれない程度に遠回りをするほど犬が苦手だったのです。

さらに、わが家には「ハムスターよりも大きいペット禁止令」(by 夫)が出ており、幼い息子が犬を飼いたいと言ったときにも内心、「子どもの世話で手一杯なのに犬だなんて...」と思いました。

ところが、仕事帰りのある日、ハムスターの餌を求めて立ち寄ったペットショップで、びっくりするくらい大きな顔のベージュ色の犬を見たのです。その犬は、狭い通路に置かれた小さなオリの床に姿勢よく座り、大きな耳と、人のような静かな目をこちらに向け、私を観察していました。

犬にも「白目」があるのだと、そのとき初めて知りました。

犬という生き物は、常にせわしなく動き、人に向かってじゃれついたり、吠えたりするもの思っていたので、ペットショップにいるくせに可愛らしさも愛想も持ち合わせず、いかにも売れ残っているくせに哀愁さえも感じさせないこの犬に、哲学者のような目でじっと見られた私は、なんだか落ち着かない気持ちになり、このことを誰かに話さずにはいられませんでした。

家に帰って、「人みたいに大きい顔の、猫みたいに静かな、見たこともない風貌の犬が私をじっと見ていたんだよ。」と興奮気味に夫に報告しても、「犬なんかぜったい、だめだからね!」と一蹴され、2年が経ちました。

哲学者との再会

あの不思議な風貌の犬に出会ってから2年が経ったある日のこと、駅前の雑貨屋に立ち寄った私を待っていたのは、あの犬にそっくりな置物でした。

それは、狭い陳列台の上に他の犬たちと並んで姿勢よく座り、大きな耳と、人のような静かな目をこちらに向け、私を観察していました。

置物とは思えないほどリアルな作りで、そっと持ち上げるとずっしり重く、どうやら石の塊を彫って作った輸入物のようでした。

けれども、私が衝動買いしてよい値段を超えているのを確認し、陳列台にそっと戻し、店内をウロウロしてみました。

何か他に目を引くものがあればそれを買って、あの犬の置物を諦めようと思ったのですが、「...夫が何て言うだろうか、あれを買って帰ったら嫌味だと思うだろうか...。」などととりとめもなく考え、他の品物がまったく目に入りませんでした。

さんざん迷った挙句、私はあの犬の置物をレジに運んでしまいました。

店を出て、心とは反対にずっしりと重い箱をぶら下げ、札幌駅から電車に乗り、最寄り駅の駐車場で車に乗り込むと、もう我慢できなくなり箱をあけて置物の犬を助手席に座らせ、転がり落ちないようにシートベルトをしてみました。

フロントガラス越しに太陽の光が当たると、犬の顔にはめられた2つの茶色いガラスの目が、何かいたげにこちらを見つめています。

傍目で見ると妙な光景に違いないのですが、そのときの私は嬉しくて、仕方がなかったのです。

「さあ、うちに帰るよ！」

と犬に話しかけ、がさがさした冷たい頭を撫でました。

それから数日経った日曜日に夫から、

「犬を見に行こうか？」

と誘われ、耳を疑いました。夫の口からは、聞けるはずのない言葉でした。

リアルな置物の犬に名前まで付けて可愛がっている私を見て、「とうとう頭がおかしくなった...」と気の毒に思ったのか否か、今でもさだかではないのですが、わが家の「ハムスターよりも大きいペット禁止令」はついに解かれ、夫と私はなんと、子いぬを見に行くことになったのです。

子いぬと『なかざわさん』

2007年の秋のある日、夫が「犬を見に行こうか？」と言いました。ペットショップにはいろいろな子いぬがいて、入り口から一匹ずつゆっくり吟味していたわたしに夫が、

「かわいいのがいるよ」

と、いちばん奥のケージにいる、目の大きな白っぽい子いぬを指差しました。

女性店員が子いぬを数匹ずつ、床の狭いスペースで運動させていたのですが、その白っぽい子いぬの順番はまだ来ないようで、ケージの中から大きな目で彼女をじっと見つめ、彼女の動きにあわせてケージの中をいったりきたりしています。大きな頭をささえるには小さすぎる足で、よろよろと懸命に歩き、忙しいお母さんに振り向いてもらいたくて後追いつている子どものように見えました。

そのときの私は、子いぬという生き物が、どんな餌をどのくらい食べ、どうやってオシッコのしかたを覚えるのかさえも知らなかったのです。

ようやく夫の許可が出て、うちに来てくれるかもしれない子いぬにやっと会えたというのに、私の心の中には喜びではなく、不安がもくもくと立ちこめていました。

共働きで、朝から晩まで職場にいる私に、ちゃんと子いぬを育てることができるのか、留守の間に子いぬがさみしくなっていてずっと鳴いているのではないか、人間の子どものようにしょっちゅう具合が悪くなったとしても、仕事を休んでずっとそばに居てやれるとは限らず、本当にそんな家に連れて帰ってよいのだろうか...、と。

女性店員はその店の店長で、初めて犬を飼う私の不安を察して、世話のしかたをひとつひとつ丁寧に教えてくれましたが、それでも私の不安はなかなか消えませんでした。

帯広の農家出身の夫は、外で犬を飼っていたことがあり、私ほどの不安はない様子で、

「今日連れて帰らないと、きっと売れちゃうよ。どうするの？」

と、完全に勇気を失っていた私の背中を押してくれたのでした。

店長さんは、子いぬのあたまにちょっとキスをして、ぎゅっと抱きしめた後、子いぬを小さなダンボール箱にそっと入れ、子いぬが住んでいたケージから小さなピンクのぬいぐるみをひとつ出して、箱に入れました。（そのぬいぐるみに私は後日、店長さんの苗字を勝手にもらって『なかざわさん』と命名しました。）

そして箱のふたを閉められたあとも子いぬは、声も出さずにじっと薄暗い箱におさまっているのです。

まるでお母さんから子どもを引き離すような、むごいことをしているような気がして、私は胸が痛くなりました。

けれども、「店長さんはこれが仕事なのだから、子いぬとの別れはしかたのないことなのだ」と思うことにして、子いぬと小さなピンクの『なかざわさん』が入った箱を恐る恐る抱きかかえ、

夫と店を出たのです。

声も出さずに、じっと薄暗い箱におさまっていた子いぬは、車に乗せたとたんにかさがさと動き始めました。ふたを開けると、「出して、出して！」といわんばかりに後ろ足で立ち上がり、箱のふちにつかまって、元気よくあばれ出したのです。

「店でおとなしいふりをしていたのは、買ってもらうためだったのか、...騙された！」と、運転席の夫が笑いました。

子いぬを抱いたこともない私のひざの上は、相当居心地が悪かったらしく、子いぬはますます落ち着きなく動き回るのでした。

ペットショップから見知らぬ家に連れて来られた子いぬを大歓迎してくれたのは、当時高校をやめてアルバイトをしていた息子だけでした。

中学生だった娘は、「子いぬの名前を何にするか？」という話し合いには参加したのですが、ところかまわず跳ね回って粗相をし、誰の手でも容赦なく甘噛みをする子いぬを怖がり、可愛がるどころか、見向きもしなくなったのです。娘は、

「どうして犬を飼うことにしたの？噛まれるし、怖いよ。」

と不服そうでした。幼い頃、公園でよその犬に追いかけられたこともあり、それほど犬が好きではないのでした。夫は、

「お母さんはね、言うことをきく、小さな子分が欲しいんだよ。」

と言って娘をなだめました。

確かに、息子が高校を中退して学費がかからなくなった途端、私を支えていた「親としての使命感」のようなものがぷつんと切れてしまったような、妙な寂しさがありました。夫は元々、「勉強に向いていないやつが、無理に高校に行く必要はない」という考えの持ち主でした。私が焦って息子を塾にやったり、大学に入りやすい私立高校に入れたりした結果、息子は授業についていけず、髪を染めたり、学校にタバコを持ち込んだりと彼なりの小さな抵抗を繰り返し、2年生になる前に、とうとう学校から追い出されてしまったのです。

その間中、息子を励まし、かばい、何度も学校に戻るためのチャンスをくれた若い担任の先生は、最後の日にわざわざ家に来てくれて息子と話し、男泣きしていました。

私の子いぬをどうしても迎えたかったもうひとつの理由は、娘の反抗期の兆しでした。

私自身が中学生だった頃、優しくした父親に対する原因不明の嫌悪感や、あのとき自分がとってしまった冷たい態度を、今度は娘が夫に対して向け始めるのではないか、という不安がありました。

夫は、自立しかけた娘の複雑な気持ちに気づき始めながらも、娘が小さかった頃と同じように話しかけ、子ども扱いし、猫かわいがりしています。娘は、そんな父親の態度をわずらわしいと感じ始める年頃になっていました。

子いぬという新しい家族の登場によって、夫の娘への執着が少しでもやわらぎ、娘の複雑な気持ちも、少しでも良い方向にまぎれてくれたら、という淡い期待がありました。（つい先日、3年も経ったのもう時効だと思い、この浅はかなもくろみを夫に告白したところ、夫は怒らずに苦

笑し、娘もくすっと笑っていましたが…。)

しかし、「言うことをきく小さな子分」どころか、「言うことをきかない小さな姫」にこのあと、家族全員が振り回されることになるとは、誰も想像することができませんでした。

ちい、鶏の骨を飲む

家族会議の結果、子いぬの名前は「ちい」に決まりました。

「フレンチブルドッグ」という犬種なので、「フウ」か「レン」か「チィ」の3択で、多数決で「ちい」になったという単純な由来です。

あとで気づいたことですが、犬の名前というのは、狂犬病の予防接種などで動物病院に行くと、苗字をつけて「井上ちいちゃ〜ん、診察室へどうぞ！」と呼ばれてしまうのです。ここでもしも、「井上ドリスちゃ〜ん」などというとても素敵な、ハーフのような名前と呼ばれてしまうと、うっかり周囲の視線をあびてしまうことにもなりかねません。

「ドリスちゃん」という名前ですと、どうしてもふさふさの長い毛にピンクのリボンをつけた、思わず駆け寄って抱き上げたくくなるような、可愛らしい小型犬を想像してしまいがちですが、呼ばれた犬を見ると薄茶で短毛の、びっくりするくらい大きな顔の犬だったりすると非常に残念なので、「ちい」というなんの変哲もなく、何の期待感も抱かせない名前にしてよかったと思う今日この頃です。

ちなみに、半年後にブリーダーから送られてきたちいの血統書には、「D o r i s」というとても素敵な名前（本名？）が小さく書かれていたのです。犬好きの友人の話では、犬のブリーダーがつける名前の頭文字は、その母犬の何度目の出産で生まれた子いぬかを判別できるように決められているそうです。「A」は1回目の出産、「B」は2回目、「C」は3回目、「D o r i s」の「D」は4回目だとのこと。このルールから、ちいのお母さんは、少なくとも4回、全部で20匹近い数の子どもを産んでいるのだなあ、とわかります。

子いぬと暮らすのが初めての私たちにとって、ちいのすることの全てが驚きの連続でした。生後2か月で、始めはよろよろと歩いていたのに、数日後にはかなりしっかりした足取りで駆け回り、人間の赤ん坊と同じように見るものを何でも口に入れてみるのですが、そのスピードの速いこと！床には物を置かないように気をつけていても、椅子伝いに食卓へぴょんぴょんと駆け上がり、止める間もなく夕食の皿の上にあった骨付きのチキンをくわえてしまったことがありました。あわてて口を開けさせ、骨を取り上げようとしたのですが、ちいもせっかくの獲物を取られまいと必死でした。私が指をざっくりとかまれたときには、すでに骨付きチキンはちいのお腹の中におさまってしまい、夜間の動物病院を探してちいを抱え、夫婦で車に乗り込みました。

獣医の先生によると鶏の骨は、お腹の中で解けていくときに鋭くとがり、万が一腸を傷つけたりすると命にかかわるとのことです。絶対に食べさせてはいけないのですが、私の不注意で食べさせてしまったのです。また、こういうときに無理に口から取り出すと、喉の内側を傷つける恐れがあり、それもしてはいけないということでした。私が口から骨を取り出せなかったのは、不幸中の幸いだったのです。

ちいは、3日間病院に通い、胃の中で鶏の骨が溶けていく様子を毎日レントゲンで撮られました。その間私は、当時勤めていた会社を休むこともできず、家に帰ったら、ちいがひとりで死んでいるのではないかと思うと、仕事が手につきませんでした。先生は、「胃の壁は、針を飲んでもささらないほど丈夫だけれど、腸に流れてしまうと危険なので、絶対にお腹を押ししたりしないようにね。」と言いました。幸いちいは、骨を肉ごとまるのみしていたので、そのままでは腸に流れてはいかず、消化剤のおかげで、みるみるうちに骨が溶けていく様子がレントゲンで確認でき、3日目にはすっかり骨の影が見えなくなりました。

その後もちいは、家族が油断している隙に、置いてあった洋服からやや大きめのボタンを引きちぎり、飲み込んだりしてみたようです。ある日、夫の携帯電話のストラップに塗装のはがれかけた金属ボタンがお守りのように大事にぶら下げられていたので、「それ、いったいなあに？」と聞くと、「ちいのお腹から、出てきたんだよ。なにか吐いているなと思ったら、これが...。」とのことでした。

ちいは甘噛みのくせもひどく、特に私の手ばかりをいつも噛むので、顔を拭いてやることも、なでてやることも容易ではありませんでした。小さくてもさすがにブルドッグで、あごの力が強く、歯磨きのときに指をかまれることもあり、けっこう痛いのでした。

ある日、家に来ていた母に、ちいの甘噛みの悩みを相談すると、
「犬はね、手がないから何でも口でくわえるんだよ。ちいは、手をつなぐかわりに、口であんたの手をひっぱって、『遊ぼう、遊ぼう！』って誘っているんだよ、きっと。」
と言いました。

母は、ちいが喜んで飛びつこうものなら、「きゃあ〜！」と本気で怖がり、逃げるほど犬が苦手です。何があってもいつも冷静で、気丈な母が、小さな犬を怖がる様子がなんとも母らしくなくアンバランスで、かわいい人だなあ...とほほえましく思っていたのですが、犬嫌いでありながら、犬の気持ちをそんなふうに想像し、理解を示す母に、驚きました。

「遊ぼう！」と誘うちいの手（口ですが）を私は、そのたびに振り払っていたのかと思うと、ちょっと胸が痛くなりました。それからは、噛んでもいいように小さいボールや、牛の骨を買ってきて、ちいと少しずつ楽しく遊べるようになりました。ちいはやがて大人になって、今では私の手を甘噛みすることもほとんどなくなりました。

ちいがわが家に来てからもうすぐ一年となったころ、散歩のたびに気になることがありました。ちいは、ご近所の散歩犬と行き会い、挨拶をかわすとき、なんとなく相手の犬に嫌がられているようなのです。ちい本人は、フレンドリーに相手に近づき、仲良くしたい様子なのですが、相手の犬から見えるちいはきっと、「がにまたで、前のめりでゼーゼーいいながら、必要以上に接近してくる大きなこわい顔の、なれなれしいやつ」なのでした。

ちいに悪気はないはずですが、鼻先が短いため、ものすごく相手の顔に密着しなければ、においかぎの挨拶ができないのです。鼻先の長い犬同士ならば、お互いの目の位置は、数十センチの距離を保つことができますが、ちいの場合はその距離が半分になってしまい、威嚇と思われ、ときには吠えられてしまうのでした。

「ちいは、このまま友だちと遊ぶこともなく、一生を終わるのだろうか...？犬は、群れを成す動物のはずだけれど、さみしいとは思わないのかなあ？」という不安が私に、犬のしつけ本を買いあさらせました。けれども、どれを見ても「犬は飼い主の愛情を独占したいと思っている」とか、「犬を2匹飼えば、飼い主の愛情は半分ずつになってしまい、犬にはストレスが溜まる」と書かれていました。

中には、「先住犬と相性の悪い犬を2匹目として迎え入れた場合、2匹を同時にケージから出して遊ばせることはできない」などという恐ろしい例もありました。

「先住犬がおっとりしている場合、2匹目の迎え入れは比較的うまくいく」という説もありましたが、ちいはかなり神経質な犬です。うちに来てしばらくの間は、ひざの上で眠ることもなく、人に体をさわられることも嫌がり、特に、頭を撫でられそうになると、獅子舞の獅子のように頭を振り、撫でようとした手をかわす子いぬでした。

そんな勤め帰りのある日、いつものペットショップに寄ると、白っぽい子いぬが目に入りました。誕生日が3か月前とは思えないほど体が小さく、胴が魚みたいにくすくすの子いぬは、ペットシートを取り替えようと、ショーケースの扉を開けた若い女性店員のひざの上にぴよんと飛び乗り、はしゃいでいました。掃除が終わったショーケースに戻された子いぬにそうっと近寄った私は、心の中で、「...ねえ、うちに来て、ちいの友だちになってくれる？」と話しかけてみました。

「ちいって誰さ？...オレ、行ってやってもいいけどさ。」

子いぬは、ちょっとなまいきな白黒の顔でわたしをじっと見て、そう言っているようにも見えました。

私は思わず、女性店員に、

「この子いぬの、写真を撮ってもいいですか？」

と話しかけてしまいました

新しい子いぬ

その夜、ペットショップで撮らせてもらった子いぬの写真を夫に見せ、飼ってもいいかどうかをたずねてみました。ちいが「ともだち」と遊ぶ姿を見てみたい、という私の願いについては、私という人間のエゴにしか思えず、夫には黙っていました。

「いいんじゃない？二匹のほうが、ちいも楽しいよな？」

夫は、二人目の子どもができたときと同じように喜び、即答してくれました。だめだと言われたら諦めようと思っていた私は、何の反対もしない夫に、ちょっと拍子抜けしましたが、子どもたちとは違って一生自立せず、その最期を必ず看取ってやらなくてはいけない命をもうひとつ預かるのですから、お互いに、口には出しませんが、相当な覚悟の上でのことでした。

翌日、仕事帰りに新しい子いぬを迎えにペットショップへ行きました。子いぬは、薄っぺらな胴体から、あばら骨が透けていましたが元気は良く、若い女性店員は、「ごはんを食べるのが速くて、数秒で食べちゃいますよ。」と言って笑いました。

私は内心、ここで大きく育ってしまって、買い手が見つからないと大変だから、きっとちょっぴりしか餌をもらえないんだろうなあ...と、育ちそびれた子いぬに同情しました。

若い女性店員は、とても丁寧に子いぬを渡してくれましたが、なんとなく、この人にもう会うことはないだろうな、と感じました。別のお店でちいを渡してくれた「なかざわさん」には、その後、夫と二人で挨拶に行き、ちいが元気であることを報告したのです。なかざわさんは私たちを見るなり、「ぶぶちゃんは元気ですか？」と声をかけてくれました。売り物の子いぬに名前をつけると情が移るので、「ぶぶちゃん」みたいな適当な名前と呼んでいたそうですが、ちいのことをちゃんと覚えているなかざわさんは、幼かったちいにたっぷり愛情をそそいでいたに違いありません。

新しい子いぬ入りの小さな箱を抱いて、札幌駅に着いた私は愕然としました。事故で電車が随分遅れているのです。なにもこんな日に...と思いましたが、家の最寄り駅に車を置いてあるので、地下鉄で帰るわけにもいかず、窓口で子いぬ入りの箱に「手荷物」のシールを貼ってもらい、ホームへ上ってみることにしました。

ホームには電車が来ていましたが、待ちかねた乗客でデッキまでぎゅうぎゅう詰めです。そのとき、デッキにいたひとりのご婦人が私の「手荷物」を見て、「ここにそれを置きなさい。」と荷物置き用の低い棚を指差し、手招きしました。ご婦人の隣に立っていた彼女の旦那様が「子いぬかい？」と、微笑みました。

満員電車のご夫婦

事故で満員になった電車のホームで「手荷物」を抱え、うろうろしていた私を見て、「こちらにおいで」とデッキから手招きをしてくれた熟年のご婦人は、ご自分も犬を2匹飼っていることを話してくれました。

「シーザーの兄弟でね、ペットショップで、2匹一緒に居たのよ。それでね、引き離すことができなくて、2匹とも飼うことにしたの。...オスの犬はね、かわいいわよ。人間と同じで、いつまでも子どもで...。」

通路もデッキも、人でごったがえしている中で、ご婦人と、隣に立っている旦那様に囲まれたわずかなスペースは、なんとも居心地の良い場所でした。デッキと客席の間の、腰の高さにパイプを並べた荷物棚の上で、箱の中の子いぬはじっとおとなしくしています

旦那様は、奥様の話をうんうん、とうなずきながら聞いていましたが、
「...フレンチブルドッグか、見たいなあ！」
と、子どものように目を輝かせて言いました。けれども奥様は、
「こんなところで箱を開けたら、子いぬがびっくりしちゃうでしょ。だめ、だめ。」
と、たしなめるように言いました。

確かに、ぎゅうぎゅう詰めの中の子いぬがキャンと鳴いたりすれば、乗客たちの苛々がいつそう募ってしまうに違いありません。私は、子いぬの顔を見せてあげたいのを我慢して、私よりもひとつ手前の駅で降りるお二人にお礼を言い、車窓から見送りました。

偶然出会ったご夫婦の温かい言葉のおかげで、夜にひとりで子いぬを連れて帰る不安も、こんなにひどい満員電車に子いぬを乗せてしまった後ろめたさも、どこかへ吹き飛んでいました。上野幌駅で電車を降り、車の助手席に子いぬの箱をシートベルトでくくりつけ、家へと急ぎました。子いぬは、箱にあけられた小さな空気穴からときどき、外を覗いているようでした。

「ねえ、お母さんたら、本当に買ってきちゃったよ！」
夫は、あきれたと言わんばかりの口調で娘の部屋に向かって叫びましたが、目が輝いていました。
「ええっ、本当に!？」
娘はびっくりして部屋から飛び出し、私が抱えていた箱の中を覗き込みました。そのころには、ちいと仲良しになっていた娘は、もう新しい子いぬを恐れたりはず、歓迎してくれました。

母の言葉

新しい子いぬを家に迎えた私は、娘が生まれたときの母の言葉を思い出していました。

『...いいかい、下の子が生まれたら、上の子にうんと構ってやらなくちゃだめだよ。赤ん坊は小さいうちは何もわからないけど、上の子は、赤ん坊にお母さんを取られたと思って、とても傷つくんだからね。』

息子は小さなときから気持ちの明るい子で、妹の誕生を無条件に喜び、受け入れてくれました。初めて息子に抱っこされて驚いた娘は、顔を真っ赤にして大声で泣き出し、息子をちょっと悲しませましたが、その後も息子は保育園で、小さな妹をととても可愛がっていたようです。息子が妹の様子を見に、ベビーベッドのある保育室を一日に何度も覗きに行き、窓から眠っている妹の名前を連呼するので、他の年長児も、息子につられて同じ行動をしていたそうです。保育園の先生は娘のことを、

「お兄ちゃんのおかげで、すごい人気者なんですよ。アイドルです。」
と、おおげさに教えてくれました。

息子と違って神経質なちいが、無条件に新しい子いぬを受け入れるとは思えず、私や家族が子いぬに触っているところを、ちいに見せたり、ちいのナワバリである居間に子いぬを入れたりして刺激してはいけない、と思いました。ちいがやきもちを焼いて、子いぬを攻撃するようになるかもしれないのですから。そして娘の提案で、子いぬは、ちいのご対面できるようになるまでのしばらくの間、居間の隣にある娘の部屋に居候させてもらうことになったのです。

子いぬの名前は、「ふう・れん・ちい」の三択（または「フ・レン・チ」の駄洒落ですが...）から「ちい」を除く二択となりました。

白黒で、白の比率が圧倒的に多く、短毛ですが猫のようにふわりとしたやわらかい毛を持つ子いぬの風貌には、「ふう」という名前が似合う気がしました。ところが、実際に名前を呼んでみると、どうも歯切れが悪く、しっくりこないのです。

子いぬの「ふう」は、その日のうちに「れん」に改名されました。私は、ペットショップの女性店員がくれた、生まれて間もない「れん」の顔写真を娘の部屋の入り口に貼りつけ、

「ちい、ここにはね、この子がいるからね。入っちゃダメだよ。」
と、ちいに教えました。家族の誰かが「れん」を見に娘の部屋に入るときには、他の誰かがちいと遊び、ちいを居間にひとりきりにしないように気をつけました。

それから何日もかけて、はじめは娘の部屋のドアを少しだけ開け、ちいに子いぬの姿を覗き見させました。子いぬの「れん」は、ちいよりもペットショップ暮らしが長く、いろいろな人や犬を見慣れているためか、ちいの姿を見てもさほど驚きもせず、ケージの中でおとなしくしています。ちいは、初めて見る牛模様の小さな生き物に興味津々で、とても興奮していました。

そして何日か後に、ちいとれんはケージ越しにご対面し、お互いに鼻を近づけてにおいかぎの挨拶をしました。ちいはれんに向って吠えたりしなかったのも、その翌日、居間で2匹を遊ばせてみました。ちいは、まるでお母さん犬のように、小さなれんのおいを気の済むまでかぎ、体のあちこちをペロペロとなめ始めました。一方、れんは体は小さくても、心はもう赤ん坊ではないらしく、しつこくお世話をしたがるちいに戸惑っているようでした。そのうちにれんは、ちいを相手に元気よく鬼ごっこのような遊び（体当たり？）始めましたが、ちいはれんの体が小さく、力も弱いことをわかっているようで、れんがけがをしないように手加減しながら、恐る恐る相手をしているようでした。ともかく、ちいがれんを敵視せず、受け入れてくれたように見えたので、私たち家族はほっと胸をなでおろすことができました。

「れんちゃんは、フレンチにしてはとてもいい子ですね。診察にも、とても協力的です。」動物病院の先生にほめられたれんは、診察が終わり、会計を待つ間も、私のひざの上できちんとおすわりをして、いい子にしていました。ところが、家ではちいが楽しんでいるおもちゃをいつも横取りする、やんちゃですばしこい子いぬでした。

ちいは今でも、れんが成長して、自分よりも大きくなったことに気づいているのかどうか、さだかではないのですが、おもちゃを横取りされても『自分はお姉ちゃんだから...れんは小さいから...』と、けなげに我慢しているようにも見えます。

れんは、ちいの食べているご飯のどんぶりに横から顔をつっこもうとして、ちいにひどく怒られたことがありました。それ以来れんは、横取りしても許されるものと、そうでないものがあることを理解したようで、二度とちいの食事の邪魔はしません。奪い合うおもちゃがないときは、ケンカをする必要もないようで、2匹はならんでベランダの外をいつまでもながめていたり、一緒に絨毯のカドをかじって飼い主に叱られたり、眠くなると体を寄せ合って眠ったりして暮らしています。

さて、11回にわたり連載させていただきました「ちいとれんのお話」も前回、先住犬の「ちい」が子いぬの「れん」を無事に受け入れ、平和に暮らし始めたところで一段落となりました。夫に、犬話は終わりだよ、と話すと、

「えっ!? まだ、ちいとキャンプに行ったことも、ちいが焼き鳥とバターを盗み食いしたことも、何にも書いてないじゃない。」

と残念そうに言うのです。

私としては、キャンプの話を書こうとすると、小学生のときに「夏休みの思い出を作文にしてください。」と宿題を出され、作文が苦手で何も書けず、家で母に付きっきりで手伝ってもらい、ようやく書き上げた苦しい思い出がよみがえるのです。傍で見ていた姉に、

「あなたの作文は、『そして』ばかりだよね! 『そして、キャンプに行きました。そして、ごはんを作って食べました。そして...、そして...。』って、ちっともおもしろくないよ。作文は、漢字をたくさん使えばいいってもんじゃないんだよ。」

と笑われ、幼心が深く傷つき、以来、作文がますます嫌いになったのでした。

れんが来る前の夏に一度だけ、ちいを連れて家族で海へキャンプに行ったのですが、さて、もうテントで寝ようか、という時間になったとき、「ちいをどうすれば安全か?」と悩みました。子いぬだったころのケージは持っていったのですが、テントの中に入れるにはテントが狭すぎます。けれども、テントの外のケージにちいを寝かせて、朝起きたらちいがケージから連れ去られ、いなくなっていた、なんていうのも困ります。キャンプ場といっても太平洋側の静かな場所で、夜になるとほとんど人もいなくなり、辺りがけっこう不気味なものでした。テントの内側の細い支柱にちいのリードを結んでも、ちいの力で「ぐいっ」と引っ張れば、きっと折れてしまいます。困った末に私は、自分の体にちいのリードを結びつけて寝ることにしたのでした。

夫は今年も、

「ちいとれんを連れて、大岸海岸へキャンプに行こうよ。れんは一度もキャンプしたことないんだよ。」

と言うのですが、ちょっとそこまで車に乗せても興奮してゼーゼー息の荒くなる2匹を乗せて遠くまで行くのは

不安です。いつも、

「そうだね。(2匹が)もう少し大人になって、落ち着いたら行こうね!」

などと適当な返事をして済ませている、今日この頃です。